

めない私も、その一口を味った。この時は先生も句作の折とは全く違つた態度に打解けて下さつて、時の過ぎるのも忘れて談笑が果てしもなく湧いた。「水巴句帖」の序にあるおさとさんが、まめくしく音もたてずに更けた勝手では働いてゐた。先生の独酌論を初めて聴いたのもこの席だった。七つ八つの頃から酒盃一つ無い断酒の家に育つた私にも、あの独酌論はびたりと来た。実に要領を得て味深いもので、あれを思ひだすと、いまだに酒がのめない私も、一寸やつて見たくてならなくなる。そしてなほ飲まずして独酌論の信者である。

続いて直ぐに「曲水」第一巻第一号が出た。暫く「智仁勇」俳壇に雌伏した曲水吟社を率ゐて、初めて先生が俳壇へ一流の旗幟を翻したのがそれであつた。今はもう知る人も尠いかも知れないが、アート紙のうんと厚いのに大きく刷つた碧雲居士の髪切虫の表紙、あれを、私はどんなに嬉しく抱へたか。

その後数日たつて、先生へ連夜吟のお礼に伺ふことになり、約束の晩、苔雨君が私を初めて訪ねて来てくれて、一緒に丹後町へ伺つた。まだ二人もてんでに悪口をき、合ふまでの親しさではなかつた。「さうではないですか」「え、さうでせう。多分さうだらうと思ひます。」位な話を二人は途々して行つた事を覚えてゐる。丁度晩酌中だった先生は、二人を初めて奥の茶の間に通された。後には私達が随分親しんだ膳を前に酒盃を置いた先生へ、私達は連夜吟のお礼を述べた。先生の座右には連夜吟の句稿が、曲水第二号へ発表する分の上に二重丸が打つて置いてあつた。何がなし胸を躍らせつ、それを見ながら、それに

就ての句評などを傾聴した。先生の背にあたる壁の隅には風呂呂先が立て、あつた。真白な地へ「清水の舞台を落つる手鞠かな」を初めに、それにふきはしい句を心にくいばかり面白く散らし書にしたその小屏風を、私は趣き深く眺めて歸つた。

かうして、先に私の頭に起つてゐた三つの路の何れへ行くべきかの疑問は、全く運命ほどのすなほさで、私を、辿るべきたゞ一つの路へ導いてくれた。私は覚束ない足どりで、その路を歩きだした。

この時分、先生はもう丹後町の控宅を引払つて、浜町の本宅へ移る事になつてゐた。初めて先生を其処で識り初めてほんとうに俳句に参じたその家から先生を失ふのは、近くに住むだけに、私にはかなり寂しい事だった。秋晴のしたある日の午後、私は何の気もなく散歩の足を丹後町の方へ向けて見た。柿の木の見える門に出てるた見なれた表札はもうなかつた。私はすぐく足を返したが、その後三年、赤坂にゐた間、折にふれては私は丹後町へ路を曲つたものだった。

この丹後町の連夜吟の感銘は、余程集まつた者の印象に深かつたもので、そのまゝにして終ふのが惜しく、誰から言ひだしたともなく、せめて毎晩集つた五人の者だけでも、連夜吟の心持を續けて句を作らうといふ事になり、とうく五人の句会を毎週一回催す事になつて、第一回を夜寒の頃に、当時よしを君がゐる芝の寄席の太鼓の聞こえる下宿で開いた。宮崎杏錢子君がよしを君の友人といふので加はつたと思ふ。やがてこれに寒燈会といふ名が付いて、後年の寒燈吟社の前身になつた。